

羞 恥

——「自己」をめぐる——

池 上 哲 司

一

「自己」とは何であろうか。日常を生きるとき、われわれはこのような問いを立てたりなどしない。そこでは、自己とは私である、私は私であるという自明性が支配している。この自明性は強固である。したがって一度この自明性が失われるなら、われわれは混乱をきたし必死の思いで自己なるものを捜し求めることになる。しかしことさらに自己とはと問うときそして問うにしても、自己は決して容易に姿を現すものではない。

自己をそれだけで直接的に把えようとするとするなら、自己は具体性を欠きこの生を生きる自己とはいえなくなる。なぜなら、生き働く具体的自己とは、他者と共に生きるものであり、他者との関係の内に生きるものだからである。つまり自己は他者と絡み合うという仕方で生きており、他者抜きで考えることはできないのである。しかしそれだからといって逆に、自己を他者との関係という視点から把えきることができるとはいえない。というのは、自己と他者との関係は決して固定的なものではなくたえず変化するものであり、その他者との関係を変えていくものとして自己があるからである。つまり「自己」には本質的に「他者ではない」という意味が含まれていると考えられるのである。

このように自己はわれわれの手をすりぬけていってしまう。しかしそのすりぬけ方から逆に自己というもののぼんやり

した姿が見えてくるのである。つまり「自己とは何であるか」という先の問いの答えを見いだすためわれわれは、一方で他者という迂回路をとりつつ、他方で自己の自己性ともいうべきものに注意を向ける必要があると考えられるのである。ここで自己とは、われわれに最も遠いものとしてと同時に、われわれに最も近いものとして現れているのである。そしてこの緊張の内に生きる自己こそが生き働く具体的なわれわれの自己である。そこでわれわれは自己が他者を背景に顕在的となる羞恥という現象を考察することによって、具体的な生きて働く自己なるものの姿を明らかにしたいと思う。そのために次に、羞恥という現象をも可能にするわれわれの経験というものに注目することになる。

*

他者を背景に自己が顕在化していくことは、羞恥という現象に限られるものではない。論争であれ、恋愛であれ、われわれが自己ならぬものに出会い衝突するところで、われわれの自己は自己として現れてくる。さらに書かれたものの解釈、あるいは日常での言葉の意味の了解においてさえこのことはいえるように思われる。つまりわれわれの経験とは、自己と自己ならぬものとの不断の出会いによって成立しているものであり、経験の中で自己と自己ならぬものが同時に現れてくるのである。このような事情から、自己を捉えようとするとは他者が邪魔となり、それではというので他者と自己とを分離して本来の自己なるものを想定したところでその自己は空虚なものとなってしまふのである。

そこで、自己と自己ならぬものが顕在化してくる場としての経験がどのような構造を備えているかが問題となるが、ニーチェやフツサールの言葉を借りるならば、経験には地平 (Horizont) という構造が含まれているといえよう。われわれの知覚は、われわれがある点に位置していることによって一定のペースペクティヴをもつ。それと同様にわれわれの経験にも知覚におけるペースペクティヴともいうべき一定の地平が含まれ、その地平の内であれわれわれはわれわれならぬものとの出会うのである。つまり、知覚におけるペースペクティヴやわれわれ自身の関心、あるいはわれわれが生きている文化そしてわれわれがそこから生まれてきた歴史等々によって規定され制約を受けつつ、われわれはわれわれならぬものとの出会

っているのである。このようなものからわれわれの経験が規定されているというそのことが、経験の地平性と呼ばれる。いや、さらにいうなら経験それ自体が地平性を本質的に含むものであり、地平をもつということによって逆にはじめて経験が成立するというべきであろう。

このように経験が地平を帯びているということによって、われわれの経験が絶対的なものではなく相対的なものにすぎないことが明らかになる。つまりわれわれの経験はそれ自体で完結したものではないということである。ここで、われわれは経験の地平性が経験の開放性を示していることに気づくのである。経験が完結したものではないということは、われわれの経験が不断に否定され修正を受けられるものであるということであり、ここでは常に未知のものがわれわれに出会う可能性が開かれているということである。つまり、われわれの経験は地平をもつことによって常に未知のものに開かれているということになるのである。

この経験の開放性から生ずる自己が自己ならぬものに出会うという事態は、自己が自己ならぬものによって不意を打たれるとか、自己が自己ならぬものに曝されるといふ仕方で生じる場合が考えられる。そしてこのような事態にこそ羞恥の源泉が根ざしていると思われる。すなわち羞恥というものは、われわれの経験の地平性・開放性に、いやそのような有限性を帯びたわれわれ人間存在の在り方に求められるのである。

二

一においてわれわれは、われわれの経験そのものの在り方に羞恥の源泉を求めたが、二においては羞恥という現象一般に含まれる問題点をとりあげ、その過程でサルトルやシェーラーの羞恥論を概観することになる。

周知のようにルース・ベネディクトは日本の文化と西欧の文化とを比較し、前者を恥の文化 (shame culture)、後者を罪の文化 (guilt culture) ととらえた。ここで含意されているのは、恥の文化における外面性の重視と、罪の文化にお

ける内面性の重視といった対照、あるいは前者における自己と他者との関係といった水平性と、後者における自己と超越的なものとの関係といった垂直性との対照であろう。しかしこのような対照における恥というものがわれわれの考察する羞恥ではない。むしろ羞恥は恥と罪とに狭まれた領域に関わるものと考えられる。先取りして言ってしまうならば、この関係の水平性と垂直性ということは経験の内自己ならぬものに自己が曝されるという事態と連関していると思われる。つまりこの事態が自己にとつて皮相的なものであればある程、羞恥は水平的な関係の内での恥に接近する。他方先の事態が自己にとつて核心的なものであればある程、羞恥は垂直的な関係の内での罪に接近する。したがってボンヘツファーなどは羞恥を人間の原罪に、つまり根源たる神からの分離に求めさえるのである。

これらの点については四においても一度考えるところとして、次にわれわれは羞恥という言葉の二義性について触れておきたい。つまり羞恥という言葉によって羞恥感情が意味されもし、羞恥 (Scham) と羞恥感情 (Schamgefühl) とを明確に区別することが難かしいという事情があるのである。そこでさしあたっては、われわれが経験する羞恥感情という意味で羞恥という言葉を使うことにしたい。ただ強いて両者を区別するなら、羞恥とは自己ならぬものに自己が曝されるのを防ごうとするものであり、自己ならぬものに自己が曝されることによって羞恥がいわば傷つけられたとき生ずるのが羞恥感情であるということになろう。

三番目に問題になるのは、シェーラーの言葉を借りるなら身体の羞恥と心の羞恥とについてである。シェーラーはこれらを愛と欲動との関係から考えているが、後に述べるようにここでは精神と生命との対立が前提されている。しかしそういった二元的発想を拒否するわれわれには、いわゆる身体の羞恥をも心の羞恥をも同時に見込めるような別の視点を見出すことが必要とされるのである。たとえばサルトルは羞恥を、主観である私が他者の対象となつていっているという根本的な失墜の感情であるとし、身体の羞恥をも対象性という視点から見ようとしているように思われる。しかし対象性ということによって羞恥が十全に解明しうるのであろうか。シェーラーも言うように、「(自分が見られていると知ること) それ自

体は、まだ羞恥の原因とはならない。⁽¹⁾ 実際、われわれは（自分が見られていると知ること）によって怒りもし、恐れもし、また羞恥を感じることもあるのである。つまり、われわれがどのような仕方に対象となつていながら問題なのである。また対象性ということによつては、なぜ身体の特定の部位が羞恥感情を生ぜしめるかを説明できないのである。このことはむしろ文化に関わるものと思われる。そこで、どのような視点からなら羞恥現象を包括的にとらえることができるかという問題を三番目の問題点として保留し、最後に文化と羞恥との関係に触れることにしよう。

身体の特定な部位を見られることに羞恥を感じることに、あるいは特定の状況において特定の行為をすることに恥ずかしさを感じることに、これらはすぐれて文化と結びついたことであるといえよう。しかし、羞恥は文化に相対的なものであり、そこにはなんらの本質的なものも見られない、ということになるのであろうか。もしそれが正しいとするなら、身体の内んらかの部位が見られることを羞恥して隠すということ、あるいはなんらかの行為を恥ずかしく思うということ、そのことと自体はどのように理解されるのであろう。羞恥が文化によつて、文化として、成立するためには、そのような文化の在り方を可能にする人間の在り方が考えられねばならないと思われる。

以上の問題点を念頭においた上で、三における羞恥の具体的分析への手掛りとして以下にシェーラーの羞恥論を探ることにする。

*

シェーラーは「羞恥と羞恥感情」の冒頭で、羞恥感情の本来の場所について「その場所とは、人間における精神つまり思惟、観取、意欲、愛といったあらゆる超動物的な作用の総体とそれらの作用の存在形式たる（人格性）とが、動物に比較して程度の違いしかみられない生命・欲・動および生命感情と接触している場合である」と言う。⁽²⁾ つまり「霊」と「肉」、永遠と時間、本質と実存という二つのものの「橋」としての人間に固有なものと羞恥は考えられ、動物が恥じることも、神が恥じることもできないとされる。例によつてシェーラーは精神と生命という視点から羞恥感情を考えようとするのであ

る。それゆえに、「生物学的なものを越えた内容や目標に没頭していた精神的志向は、常にぼんやりと共に与えられている身体へと突然注意が後ろ向きになることがたまたま生じると、空間時間的に限局され、きわめて多くの欠乏をかかえた動物的実存に結ばれていることを見出す」⁽³⁾ そのときに羞恥が生じうるといわれるのである。しかしここでは、彼の精神と生命との二元論的発想を批判することはしない。⁽⁴⁾ 二元論的発想にもかかわらず彼の羞恥論に含まれる事柄そのものにあたっては、洞察を読みとることがここでは必要であろう。

あらゆる羞恥の内には、(自己へのかえりみ (Rückwendung auf ein Selbst)) という作用があるとシエラーは言う。例えば、火事の際わが子を助けようとして母親は下着のまま家から飛び出す、助けられたと知り、下着姿の自分をかえりみるやいなや、羞恥が生ずる。しかしサルトルの羞恥について触れたときにも述べたように、(自分が見られていると知ること) から羞恥が生ずるのではない。モデルとして画家の前に立つとき、あるいは患者として医者の前に座るとき、女性に羞恥を感じない。この場合女性は自分が「個人」として与えられているのではなく、一般的な女性モデルあるいは患者として与えられていると感じている。逆に恋人の前での女性は、自分が女性一般でなく「個人」として与えられていると感じているのである。したがって、羞恥を生み出す自己への(かえりみ)が起るのは、「ひとびとが自分を一般者として(与えられた)と知る場合でも、また個人として(与えられた)と知る場合でもない。それは、他者の志向が個体的意図と一般化的意図とのあいだで動揺するの⁽⁵⁾が感得される場合であり、自分の志向と体験された志向とが、個体化へか一般化へかをめぐって方向が一致せず反対に向っている場合である」ここにシエラーは羞恥感情の本質をみている。

しかし、彼は羞恥感情にはもう一つの本質があるとして「それは、低次の欲動的追求を強く引きつける対象に対してとられる価値選択的な高次の意識機能の未決定性を、意識の両段階での緊張⁽⁶⁾として示すような感情である」とする。先述したようにここから、欲動的追求と高次の意識機能が人間存在におけるどのレベルのものかによって、⁽⁷⁾ 身体の羞恥と心の羞恥という二つの根本的に異なる形態が導き出されるのである。

では右に示された羞恥感情の二つの本質はどのように統一されているのであろうか。シェーラーは、「これら二形態(身体の羞恥と心の羞恥)は、なんらかの一般者の全領域に対して個人の自己価値を守ることが適用される領域の内のみ」ある⁽⁸⁾と言う。つまりシェーラーに従うなら個人の自己価値が守られようとするという点から見られることによつて羞恥のいわば全領域が統一をもつて考察されうることになるのである⁽⁹⁾。

自己価値をめぐる羞恥には様々な類似感情があることをシェーラーは考察するが、それらについては三においてそれぞれに関連する箇所⁽¹⁰⁾で触れていくことにしたい。そこで最後に、シェーラーが羞恥感情を一種の自己感情 (Selbstgefühl) であるとするとき、そこでなにが意味されているのかを考えてみることにしよう。シェーラーは、羞恥がつねに羞恥を感じる者の個人的な自己にだけ関わるのではないとし、われわれは他者や自己自身へに対して (vor) と同様に他者へのかわりに (für) 羞恥することができると主張する。例として以下のように書いている。「いささか猥談めいたことが語られていても、男たちのあいだでなら私に⁽¹¹⁾なんの羞恥も起らなかつた。しかしそれに反して若い女性がその場に居ると、それだけで、たとえ彼女が恥しがらず、したがって参与的共感や伝染による感情が働かずとも私はひどく恥しさを感じ、赤面した」⁽¹⁰⁾彼の考えによれば、羞恥するという現象は、われわれの個人としての自我状態 (Ichzustand) にはまったく依存しておらず、羞恥することをそれ自身から (要求する) ような一つの事態に関わっている。いわば、われわれは羞恥によつて (襲われる (Überkommenwerden)) のである。

三

われわれは二において、前半では羞恥という現象に含まれるいくつかの鍵となるような点を指摘し、後半ではシェーラーの羞恥論の骨組みだけをざっと辿ってみた。そこで三においては、二において提示された問題点およびシェーラーの羞恥についての考え方を、一で述べられたわれわれの開かれた経験との関連の内⁽¹²⁾で検討していくことにする。

一般に羞恥は、誰かの前で (vor) 恥じることであり、そのことによって羞恥は他者を媒介すると考えられている。しかしこの「の前で」には二重の意味が含まれていると考えねばならないであろう。つまり、羞恥現象が起る具体的な場面での「の前で」という意味と、羞恥感情そのものを可能にする自己の価値像に関しての「の前で」という意味である。前者の意味にのみ解されるなら、シェーラーが示した誰か「のかわりに」(mit)「恥じる」という現象を説明することができなくなってしまうであろう。しかし後者の意味での「の前で」については四で検討することとして、ここではさしあたって前者の意味の「の前で」ということを出発点とする。

身体にまつわる羞恥とその他の羞恥を一つの視点から包括的に把握することがわれわれの課題であった。ところで、先述のごとくシェーラーは羞恥には二つの本質的働きが含まれているとし、それらによって羞恥を説明しようとした。しかしわれわれは彼の進んだ道をそのまま辿るわけにはいかない。というのは、彼の精神と生命(衝動)あるいは人格と身体といった二元的発想には問題があると思われるからである。ではわれわれは羞恥についてどう考えたらよいのか。われわれは羞恥を、自己が自己ならぬものに曝されるという点に求める。「の前で」ということを「曝される」という仕方では直したわけではない。そしてこの「曝される」ということによって身体にまつわる羞恥も他の羞恥も一括して考察されることが目指されている。さらに「曝される」ということには羞恥感情がわれわれを襲うものであるということが含蓄されているのである。

この羞恥感情に襲われるということと、われわれの経験の開放性ということが関連しているように思われる。つまり、経験が開かれていることによってわれわれは不断に未知のものへの侵入に曝されており、なんらかの未知のものとの出会いによってわれわれが陥った事態こそが羞恥感情を生むものであり、逆に羞恥感情はわれわれがそのような事態に陥っていることを示しているのであると思われる。

ただここで注意せねばならないのは、自己ならぬものに自己が曝されるといったところで、もともと固定的な自己なる

ものがあつて自己ならぬものに出会うと考えられていないということである。むしろ逆に、自己ならぬものではないものとして自己が考えられているといった方がよいであろう。では、この自己ならぬものに自己が曝されるという事態から、どういう仕方で羞恥感情が生じるのであろうか。

*

具体的な場合を考えてみる。私（教師）と学生と私の師と三人でいる場合、私は学生から先生と呼ばれるときひどく恥しく感じる。この場合シェーラーの考えるように個体化と一般化との志向の違いに羞恥を求めることができるとは思えない。ここで明らかなのは、私が学生に対しては教師であると同時に、私の師に対しては生徒であるという矛盾した関係の内にあるということである。われわれが自己ならぬものに出会うとは、自己ならぬものによって自己なるものとしてなんらかの仕方規定されるということである。つまりわれわれは自己なるものとして、自己ならぬものとのなんらかの関係の内立つということである。今の例においては、自己なるものを規定している関係で矛盾が生じているわけである。しかし、この関係間での矛盾が羞恥感情に直接結びつくとは考えられない。なぜならば、社長と課長と平社員といった三人の間でも、右にみたのと同様な関係が張りめぐらされているにもかかわらず、課長は平社員から敬語を使って話されてもなんの恥しさも感じないからである。

私が講演する場合を考えてみよう。私は恥しさを感じる、それは多数の人々の目にわが身が曝されるからであろうか。そうである。と同時に、そうではない。というのは、私が恥しいと感ずるのは、私が講演者として立つこと、講演者することによってなんらかの形で自己を曝してしまうからである。語ることの恥しさについては後述するとして、講演者として立つことの恥しさとはなにを意味しているのであろうか。ここで最初の例を考え合せらば私が羞恥を感じるのには、私に与えられたあるいは私が負う破目に陥った役割を私が出してしまうといったことに求められるように思われる。いわば、私があるものとして固定化されてしまうことに対する拒否の表現として羞恥は考えられよう。われわれは曝

されるということを羞恥感情解明のための出発点としたが、今やそれは自己の固定化ということと言い直されたわけである。

羞恥と文化との関連もこの点にあると思われる。つまり羞恥感情がわれわれの規定され方に対しての拒否の表現であることよって、文化というものが羞恥感情に深く関わってくるのである。というのは、われわれに与えられる役割の内容は、文化によつて規定されているからである。そこで羞恥というものが文化に相対的であるように見えることにもなるのである。しかしこれまで述べてきたように、羞恥の本質とは、文化によつて規定された役割の編み目をいわばすり抜け拒否するところに求められるのである。

*

結局羞恥感情とは、自己ならぬものに規定された自己なるものと、その自己なるものによつては尽くされないものとの間で生ずるものである。そして後者は前者を越えるという仕方で成立しているにもかかわらず、前者を越えることによつて前者には尽くされないものとして成立しているがゆえに、後者は前者を前提せざるをえないのである。シェーラーに於ては、〈ふりかえり〉は高次のものから低次のものへとなされたのであるが、ここにおいては、越えられたものから越えたものへの〈ふりかえり〉が起つているといえよう。

では、〈ふりかえり〉の内でなにが露にされるのであろうか。それはわれわれの在り方のあいまいさ (Zweideutigkeit)、つまり、自己ならぬものに規定された自己なるものであると同時に、また自己なるものによつては尽くされないものであるという在り方である。そしてこのわれわれの在り方こそが、羞恥感情を生み出すものである。つまり経験が開かれてあるというわれわれの在り方が羞恥感情の源泉なのである。

三を終えるにあつて、われわれは〈ふりかえり〉の〈ふりかえり方〉とでも言うべきものを一寸考えてみたい。(ふりかえり方)とは言つてみれば、規定された自己なるものをどのように越えるかといふことである。したがつて、その越え

方は各自によって異なる。しかしどのような越え方にせよ、越えるということにはなんらかの方向性が含まれているはずである。さらに、方向性をもつということは、人間の自発性を認める限り価値志向的であると考えられる。つまり、ここでわれわれは羞恥感情が価値と関わる場面へと出たわけである。シェーラーは（ふりかえり）の場面を精神と身体との間にみたが、われわれは固定されたものと固定されないもの、かくあるものとかくあらぬものとしてかくあるものを越えているものとの間にみる。ここに価値志向的側面がみられるのだが、自己のあるべき価値は志向されていながらもはつきりとは与えられていない。この間の事情についてシェーラーは、羞恥を誇りおよび謙遜と比較して、誇りにおいて自己価値は保持され、謙遜において自己の無価値が与えられるのに対して羞恥において自己価値は保持されず、自己の無価値も与えられず自己の価値が不明瞭に感得されていると述べている。

こうして羞恥感情は自己についての価値志向を前提としていることが明らかになった。他方、羞恥感情はわれわれの在り方のあいまいさを示すものであった。それゆえ、四においてはまさに羞恥の内で自己とはどのようなものとしてあるのが問われねばならない。

四

自己は、羞恥の内では未だ決定されていない不安定なものとしてある。他方また、自己はなんらかの価値志向性に基づいて、規定された自己なるものを越えるという間接的な仕方と与えられている。つまり自己ならぬものから規定されないという、自己の自己性ともいふべきものへの希求が、羞恥の内でも明らかになるのである。ところで二において恥と罪とに關して、自己ならぬものに自己が曝されるという事態が自己にとって皮相的であるか核心的であるかに応じて、羞恥は恥に接近しめすれば罪に接近しめると述べた。しかし、今では次のように述べることになる。自己性への希求が強ければ強い程、われわれの自己が固定的に把えられることに対して強く羞恥を感じそして羞恥感情に含まれる「の前で」はより

高い価値像へ、水平方向から垂直方向へと向っていくのである、と。¹¹ここに至って、「の前で」ということには二重の働きの含まれていたことが判明するのである。

次に、自己性への希求の否定的間接的な現れ方を考慮するならば、自己の自己性は決して完結したものとしては与えられないと思われる。一でも触れたようにわれわれの自己は決して規定され尽しはしないのである。換言するなら、自己の自己性は本質的に隠されてあるという仕方であるのではなからうか。¹²そして羞恥感情とは、この隠されてあるものが曝され固定化されつつもそれを防ごうとする感情と把え直されるのである。

他方また、規定された自己なるものにどのような仕方に関わるかを羞恥が反映する限りにおいて、羞恥には倫理的意味あいが含まれているのである。なぜならば、積極的にはないが羞恥によって、その人の人格の在り方が示されるからである。つまりその人の隠されてあるものが、曝されることに抗して隠されてあるという仕方で開示されるのである。

ここに羞恥感情としての羞恥 (Schamgefühl) と羞恥そのもの (Scham) との区別が明らかになってくるのである。すなわち羞恥 (Scham) とは曝されることに対して隠されてあるというまさにそのことである。

以上のように、隠されてあるものが曝されるところに生ずるものとして羞恥感情を考えるならば、羞恥感情は、永遠の途上者というわれわれの在り方そのものを示すものなのであろう。

註

- (1) M. Scheler, *Über Scham und Schamgefühl*, in: *Schriften aus dem Nachlaß Bd. I* (Ges. Werke Bd. 10, Bern 1957), S. 79.
- (2) *ibid.*, S. 67.
- (3) *ibid.*, S. 68.
- (4) この点については、拙論「人格の生成」(『思想』六五二号) 一―二章を参照されたこと。
- (5) M. Scheler, *op. cit.*, S. 79.
- (6) *ibid.*, S. 90.
- (7) シェラーは、感情によって感得される価値に価値の位

階ともいうべきものを認める。つまり、感覺的価値、生命価値、心的価値、聖・不聖の価値である。そして、各々に応じてそれらを体現するものとして、物体としての肉体、生命としての身体、心としての自我、精神としての人格が考えられているのである。

(8) M. Scheler, op. cit., S. 90.

(9) いわば、価値の高さと個性化というものが連関しているわけである。

(10) M. Scheler, op. cit., S. 81.

(11) したがって、われわれは他者の前や自己の前で、あるいは神の前で、羞恥することになるのである。

(12) だからこそ、講演することで己を語ってしまうことに、われわれは恥しさを感じるのである。

(本学専任講師)